

<文献紹介>日本の気候景観：風と樹 風と
集落

TABATA, Dan / 田畑, 弾

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

32

(開始ページ / Start Page)

64

(終了ページ / End Page)

65

(発行年 / Year)

2000-10-10

【文献紹介】

日本の気候景観 —風と樹 風と集落—

青山高義・小川肇・岡 秀一・梅本 亨編著 (2000)：古今書院，181 ページ

本書は、地理学系気候学者の中でも矢澤大二著 (1953)『気候景観』に触発・影響を受け、気候景観に関しての研究に特に情熱を注いでおられる先生方の編著による書である。

第1章 気候景観研究とは

気候景観の研究を行なうに当たっての基礎的な事項が述べられている。気候景観の概説の後には、偏形樹のパターンとグレードに関する記述、防風林と屋敷林、日本の局地風、積雪分布に関する記述がある。この章だけでも教養の気候学の授業テーマになってしまうほど、詳細に述べられているのが印象的である。

第2章 山の偏形樹をめぐって

基本的に、偏形樹、縞枯れと森林限界の謎に関する記述が多く見られる。尾瀬や立山などのいわゆるグリーンツーリズムに関係する観光登山地に関しても触れられているが、人為による植生破壊の深刻化などの問題点もこの章で述べられている。

第3章 平野と海岸で見られる偏形樹・防風林・屋敷林

気候景観の中でも「文化景観」として捉えられている屋敷林 (森) や防風林、強風のほかに海塩の作用によっても出来る海岸偏形樹、また、平野に存在するイチヨウなどの偏形樹について代表的なものに関して触れられている。屋敷林・防風林関係では、胆沢扇状地や砺波平野、出雲平野といった代表的な地域のほか、関東地方に関しても冬季節風との関連から取り上げられているが、その屋敷林・防風林が「防風」林として築造されているかどうかに関しては注意して見なければならぬと述べている。また、第1章の中でも屋敷

林と新田開発に関する記述があるが、新田開発時の土地割りに対する屋敷林の造成法に関しても記述がある。海岸偏形樹に関しては三浦半島と八丈島、琉球諸島に関する記述があるが、特に三浦半島に関しての記述は関東を含む西南日本の常緑広葉樹林帯における海岸偏形樹の典型例であって例えば銚子や伊良湖岬、紀伊半島などの他地域での巡検の際でも使い易い。

第4章 気候景観の調べ方

扉はフィールドノートのコピーを重ねたものである。ここから既にそのノウハウが伝わってくるような感じだ。ここは特に、研究対象として気候景観を扱う時の方法を記してあるが、学習を主体とする巡検にも利用価値がある。基本的にはその方法、ツールやノウハウに関してまとめられている。この章に関しては、同じ時期に発行された牛山素行編著 (2000)『身近な気象・気候調査の基礎』(古今書院)を合わせて読まれるとデータ収集や観測方法に関して心強いと思われる。

以上、本書を簡単ではあるがレビューすることを試みた。どちらかと言うと、気候景観と言う分野は研究よりはむしろ、巡検のテーマとして取り上げられる事が多いため、そのスタンスで本書をレビューした。

地球科学や地理学と言う分野ではどの分野であれ「巡検」を行うことが多い。その中でも、流体系の分野で、特に目に見えないものを扱う気候 (気象) 学の巡検を立案するとき、ある程度観測機器が揃っていないとデータ収集を目的とした巡検は出来ないと思われる。ゆえに、予算の都合などで測定機器が整備されておらず、データ収集を目的とした巡検ができない研究室も多いのではないだろうか。

もちろん、測定機器が整備されている研究室でも見学を中心とした巡検を行なう事が多いとは思われるのだが、観測を中心とした巡検が出来ない以上、「一応は目に見える」その気候景観や気候の利用・影響をテーマにした巡検を行なう事になる。

これゆえに、本書はその気候景観をテーマにした巡検を計画する際、また学生に調査の方法などを学習させる際に大変参考になると思われる書で

ある。もちろん、気候景観そのものを研究対象としている研究者や学生には待望の書である。筆者のように、卒業論文が海岸偏形樹、修士論文が平野部の屋敷林（森）をテーマにしていた気候学徒にとっては心から待ち望んでいた書であるし、研究のみならず、巡検や授業のためのツールとしても活用価値の高い書であると思われた。

（田畑 弾）